正史を訪れる

十一章　百済の王統

森隆一

武寧王陵入口（Wikipedia「百済」より）

はじめに

　百済の王統を主に考察し、併せてそれら各王家の出自も考えていく。方法としては、まず正史を眺め、王統を調べる。続いて、三国史記の王統と比較検討を行う。これは、副次的に三国史記の信頼性の検討の第一歩になると考える。

Wikipedia「東夷」

新の王莽が帝位を簒奪すると（8年）、貊人は辺境を寇した。後漢の建武（25年 – 56年）の初め、東夷諸国はふたたび朝貢した。時に遼東太守の祭肜の威勢は北方の諸族を畏れさせたため、その名声が海の向こうにまで届き、濊・貊・倭・韓といった諸族が万里の果てから中国に朝貢してきた。特に章帝・和帝以後は使節が往来するようになった。　　（正史の記事　？後漢書）

11.1. 簡文帝咸安二年

百済に関しては、倭に関連して、断片的に触れてきた。正史に百済が現れるのは、晋書の東晋簡文帝紀の次の記事である。

“簡文帝咸安二年 372 正月 百濟と林邑の王は夫々朝貢した。”

正月 百濟 林邑王各遣使貢方物

“六月 使いを送り、百濟王の餘句を鎮東將軍領樂浪太守に叙した。

遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

咸安は東晋の簡文帝の元号で、簡文帝の在位は 371 年から 372 年までで咸安も同じ期間である。東晋は山東半島から南の王朝である。また、372 年は百済が故国原王の高句麗を破った翌年である。

書かれているのは、東夷伝ではなく、本紀である。一方、晋書東夷伝では帯方郡の南には、馬韓・辰韓・弁韓の三韓が書かれている。百済が東夷伝に書かれていないことは、疑問 8.1. としておいた。

朝貢の使者に対し、その国が何処にあるかは先ず確かめることである。韓条に書かれていないということから、少なくとも、咸安二年の使者からは、百済が韓の地にあるとは聞き取ることが出来なかったということになる。

ここで、馬韓の地、または、その近くに移る前の百済を前百済と呼ぶことにする。では、前百済何処にあったのだろうか。

%% 9章おわりにとの関係(移すなど)

百済本紀に次の記事がある。

“温祚王十三年 BC5 使いを馬韓に派遣し、遷都を告げた。国を北は河まで、南は熊川、西は大海で東は範囲の及ぶところと定めた。”

遣使馬韓 告遷都 遂畫定疆場 北至河 南限熊川 西窮大海 東極走壤

“十四年 遷都した。” **遷都**

温祚王とその十三年の BC5 年という時期は早すぎると思われる。

河は漢江か。臨津江(イムジンガン)ではないだろう。Wikipedia「熊川」は錦江の別名と書かれ、沿岸には光州や扶余がある。何処に遷都したかは書かれていない。三国史記や後の歴史からも、新都は漢城(京城)でほぼ間違いないと考えている。年代を考慮しないことにすれば、ある時に馬韓かその周辺の地を領有し、馬韓にこのような通告をした、すなわち、馬韓の地を征服(攻略)したことは考えられる。また、通告して1年で遷都したことになっている。

ここで、疑問を設定する。

疑問 11.1. 前百済は何処にいたか。何時馬韓の地に建国したか。

百済本紀では

“近肖古王二十七年 372 晋に使いを送り朝貢した。” **遣使入晉朝貢**

があり、咸安二年 372 の記事と記年と合っている。

前章で引用した Wikipedia の文では、372 年の前年 371 年は、百済が攻撃してきた高句麗軍に反撃し、平壌を滅ぼした。このとき、故国原王は戦死した。ここでは、馬韓諸国が統合して形成されていた百済という記述があるが、どのように統合されたのかはわからない。

“近仇首王五年 379 晋に使いを送り朝貢したが、その使いは海で暴風に遇い還らなかった。” **遣使朝晉 其使海上遇惡風 不達而還**

この記事からは、百済から山東半島へ直接渡航したことが考えられる。京城から山東半島までは真西に進めばよく、朝鮮西端の黄海南道の甕津半島・龍淵半島辺りはほぼ中間である。

11.2. 高驪略有遼東 百濟略有遼西

晋書の次の宋書では百済国条に書かれ、次の文で始まる。

“百済国は本は高驪とともに遼東の東千里程の所にいた。その後、高驪が遼東を略有したとき、百済は遼西を略有した。百済が支配したところはいわゆる晉平郡晉平縣である。” **百濟國 本與高驪俱在遼東之東千餘里 其後高驪略有遼東 百濟略有遼西 百濟所治 謂之晉平郡晉平縣**

遼東之東千餘里 は後漢書・三国志では高句麗の位置であり、馬韓の地とは考えられない。恐らく貊・濊貊と書かれた所の何処かで間違いないと思っていて、前百済の候補地となる。したがって、本は馬韓の地には居なかったことになる。%% 高驪略有遼東の時期

宋書では、東夷高句驪國 今治漢之遼東郡 とされている。後漢書・三国志との記事と異なるのは、宋書の時代には遼東郡の東部は高句麗に支配下にあったと考えている。

“義熙十二年 416 百濟王の餘映を使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍とする。” **以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍**

“高祖が即位した時、鎮東大將軍に進めた。” **高祖踐阼 進號鎮東大將軍**

が書かれている。義熙は東晋の安帝の最後の元号で 405 年から 418 年である。高祖武帝劉裕が即位したのは 420 年である。

梁書の記事は

“百済は句驪とともに遼東郡の東にあった。晉の時代に句驪が遼東を制した時、百済もまた遼西郡と晉平郡を據有し、百済郡を置いた。”　**其國本與句驪在遼東之東 晉世句驪既略有遼東 百濟亦據有遼西 晉平二郡地矣 自置百濟郡**

で、宋書とほぼ同じであるが、略有遼東は晉の時代と書かれている。

百済の正史初出の記事である宋書 義熙十二年 416 の記事には、百済本記の

“腆支王十二年 416 東晉の安帝に使を派遣した。使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王に冊封された。”

東晉安帝遣使 冊命王爲使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王

が対応している。東晉安帝遣使 は中国語としては、安帝が遣使した、とするのであろうが、朝鮮語の語順は日本語と同じということから、

安帝に遣使した、と解釈した。

Wikipedia「高句麗」の記事から美川王に関する記事の一部を再掲する。

美川王(乙弗)300-331 は、311 年には丹東を攻略して朝鮮半島の郡県を中国本国から切り離し、盛んに楽浪郡や帯方郡を攻撃した。

313 年には楽浪郡を占領し朝鮮半島北部の支配を確立した。

馬韓諸国が統合して形成されていた百済の近肖古王によって旧帯方地域が奪われた。故国原王は 369 年と 371 年に百済を攻撃したが、これに敗れ、逆に平壌を攻撃した百済軍との戦いで流れ矢にあたり戦死した。

この 311 年を略有遼東の候補と考える。313 年は懐帝 307-311 永嘉五年になる。

晋書には高句麗条がなく、他の書で対応する記事は見つけていない。懐帝紀(永嘉年間)は始めから各地の反乱の記事が殆どで、永嘉二年からは石勒 274-333 との抗争が始まり、これが続くことになる。この結果、晋は遼東を支配できなくなったと考える。

したがって、この間の状況は高句麗本記にあたることになる。

311年の高句麗の王は15代美川王乙弗300-311である。

高句麗本記の遼東郡の攻防と百済の記事を見ていく。

“美川王三年 302　王は 3 万の兵を率いて、玄菟郡を侵し、8000 人の捕虜を平壌に移した。”　**王率兵三萬 侵玄菟郡 虜獲八千人 移之平壌**

“十二年 311 遼東郡の西安平を襲い奪取した。”　**遣將襲取遼東西安平**

“十四年 313 楽浪郡を侵し、2000 人余りの男女を虜獲した。”

樂浪郡 虜獲男女二千餘口

“十五年 314 南進し、帯方郡を侵した。”　**南侵帯方郡**

“十六年 315 玄菟城を攻め破り、多くの民衆を殺獲した。”

攻破玄菟城 殺獲甚衆

“二十一年 320 遼東郡に兵を派遣した。慕容仁が抗戦したがこれを破った。”

遣兵寇遼東 慕容仁拒戰破之

“故國原王四年 334 平壤城を増築した”。

增築平壤城

“九年 339 燕王が侵攻し、新城に迫った。盟を乞い、兵は還った。”

燕王來侵 兵及新城 王乞盟 乃還

“十二年 342 春二月 葺丸城を修築し、国内城を築いた。8 月に丸都城に移った。”

修葺丸城 又築國内城 秋八月 移居丸都城

“三十九年 369 王は 2 万の兵で百済を攻め、雉壤で戦い、敗績した。”

王以兵二萬 南伐百濟 戰於雉壤 敗績

“四十年 370 秦王の猛は燕を伐ち破った。燕の太傅の慕容評が逃げてきたが、秦に送った。”

秦王猛 伐燕破之 燕太傅慕容評來奔 王執送於秦

“四十一年 371 冬十月 百済王は 3 面の兵で平壤城を攻めた。王は出陣したが流矢に当たり死んだ。”

百濟王率兵三萬 來攻平壤城 王出師拒之 爲流矢所中

九年 339 の記事の新城は、文意より、葺丸城か。

百濟略有遼西の可能性のあるのは、美川王十二年 311 と二十一年 320 である。311 年の記事は 侵 ではなく、襲取 が用いられている。 高句麗が

楽浪郡と帯方郡を滅ぼした後、馬韓を攻略したと考えれば、311 年の可能性が高いと考える。

高句麗本記の百済の記事で、瑠璃明王二年 BC20 百濟始祖祚立 と大武神王二年 19 百濟民一千餘戸來投 の 2 つの記事を除けば、三十九年 369 の南伐百濟の記事が最初の百済の記事である。

これらから、馬韓の地の百済の成立は、高句麗が帯方郡を滅ぼした 314 年以後で、故國原王が南伐百濟 を行った 369 年までの間と考える。

これ以前は前百済であるが、前百済が何と呼ばれていたかはわからない。以上を作業仮説としておこう。

作業仮説 11.1. 百濟略有遼西は 311 年である。また、馬韓の地の百済は、313 年から 369 年の間に成立した。

殆ど答えが出ている疑問であるが、疑問 11.1 を書き換えておく。

疑問 11.2. i）晋書巻 9・簡文帝紀 に記載されている 372 年に晋に朝貢した百済は何処にあったか。

ii）高驪が遼東を略有したのは何時か。また、このとき遼西を略有した百済はどこにあったか。

iii）前百済と百済との関係は。

i）については、馬韓の地にあった。

ii）については、311 年で、1 章で述べた蓋馬高原が有力と思っている。

iii）については手掛かりが無いが、この蓋馬高原に居た前百済が遼西を略有し、追われた後、高句麗が楽浪・帯方 2 郡の攻略に乗じて馬韓に百済を建国したのではないかと考えている。

Wiki 「 帯方郡 」では

建興元年 313 遼東へ進出した高句麗が南下して楽浪郡を占領すると、朝鮮半島南半に孤立した帯方郡は晋の手を離れ情報も途絶した。元の帯方郡や楽浪郡南部に残された漢人の政権や都市は、東晋を奉じて 5 世紀初頭までの存続が確認されているが、5 世紀前半には百済によって征服され、5 世紀後半に入ると南下した高句麗が百済を駆逐して支配下へ置いた。

高句麗本記では 313 年は 侵樂浪郡で、314 年に 南侵帯方郡 と書かれている。侵 は郡衙とその周辺を滅ぼすとすれば周辺の県レヴェルの都市は存続したと考えることもできる。

Wiki「百済」国名では、

百済の国名の由来はわかっていない。三国史記・百済本紀に記載される神話では初代王である温祚王が夫余の地から遷って建国した際、10 人の家臣の助力を得たことから国号を十済とし、その後温祚王の兄の沸流に従っていた人々が温祚王の国に合流した際に、百姓が楽しみ従ったことから国号を百済と改めたという。朝鮮史研究者の井上秀雄は、三国史記の訳注にて、これを事実とは認めがたいとしている。詳細は建国神話節を参照。また、隋書百済伝は、移動の際に百家で海を済ったので、それに因んで百済という国名となったと伝えている。

たくさんの家臣団をとともに移動し、百済建国したという点は共通である。これを始祖の話とする点は日本書紀に通じる。

宋書の記事からは、馬韓の地に移る前から百済を名乗ったことになる。

濊貊　　Part II 表紙の図の濊貊

貊：mò、百：bǎi

11.3. 正史による百済の王統

前節で引用した、晋書の記事と宋書の義熙十二年 416 の記事を再掲し、南北朝の正史の百済の朝貢記事を王統を主に見ていく。

簡文帝咸安二年 372 正月 百濟 林邑王各遣使貢方物

六月 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

簡文帝の次の孝武帝でも本記に

“孝武帝太元九年 384 百済は使いを派遣し朝貢した。” **百濟遣使來貢方物**

百済王の名が書かれていないが。梁書にある晋**太元中の王須になると考える。**

“十一年 386 百濟王の世子の餘暉を使持節都督鎮東將軍百濟王とした。”

以百濟王世子餘暉爲使持節 都督 鎮東將軍 百濟王

晋書の記事からは百済の王統は

句→須

となる。

次は宋書の記事である。

“義熙十二年 416 百済王の餘映を使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍とした。”

以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍

“高祖踐阼 417 **映を鎮東大將軍に進めた。”** **鎮東大將軍**

“少帝景平二年 423 映は長史の張威を派遣し朝貢した。”

映遣長史張威詣闕貢獻

“元嘉七年 430 百濟王の餘毗はふたたび朝貢した。映の爵位を授けた。”

百濟王餘毗復修貢職 以映爵號授之

“二十七年 450 毗は書を奉り、産品を献じた。” **毗上書獻方物**

毗が死に、子の慶が立った。 **毗死 子慶代立**

世祖大明元年 457 叙位をもとめた。これを許した。 **遣使求除授 詔許**

二年 458 上書朝貢した。 **慶遣使上表曰**

太宗泰始七年 471 また朝貢した。 **又遣使貢獻**

ここまでが宋書で、百済王は

句→須→(子)暉→映→毗→(子)慶

と替わった。なお、餘映が 417 年に得た鎮東大將軍を、倭王武は 479 年に得た。将軍位に関しては、百済王は鎮東將軍から始まるが、倭王は 1 つ下の安東将軍から始まる。502 年には、百済王太は征東將軍、倭王武は征東大將軍となり、逆転した。

次は(南)斉書の記事である。

“牟大はまた表していった。・・・亡き祖父牟都”

牟大又表曰・・・亡祖父牟都

“建武二年 495 牟大は上表の使いを派遣し言った・・・。”

牟大遣使上表曰・・・

の 2 つの記事がある。祖父から継ぐことは少ないがあり得ることではある。他書では父子としている。

王統に関しては、梁書が詳しい。なお、梁は 502 年から 577 年まで続いた。

“晉の太元年間 376-396 に王須が、義熙年間 405-418 に王餘映が、宋の元嘉年間 424-453 に王餘毗が生口を献じた。餘毗が死んで子の慶が立った。慶が死んで子の牟都が立った。都が死んで子の牟太が立った。齊の永明年間 483-493 に太を都督百濟諸軍事鎮東大將軍百濟王に除した。”

晉**太元中 王須 義熙中 王餘映 宋元嘉中 王餘毗 並遣獻生口 餘毗死 立子慶 慶死 子牟都立 都死 立子牟太 齊永明中 除太都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 百濟王**

梁の天監は 502 年から 519 年まで、普通は 520 年から 527 年までである。

“天監元年 502 に太を征東將軍に進めた。高句麗に敗れてから年々勢いが衰え、南韓に移った。”

進 太號征東將軍 尋爲高句驪所破 衰弱者累年 遷居南韓地

普通二年 521 に王餘隆は再び朝貢を始めた。・・・

王餘隆始復遣使奉表・・・

“五年 524 隆が死に、その子明を持節督百濟諸軍事綏東將軍百濟王に復し

た。”　　**隆死 詔復以其子明爲持節 督百濟諸軍事 綏東將軍 百濟王**

梁書の王統は

句→須→映→毗→(子)慶→(子) 牟都→(子) 牟太

となる。

晋書と宋書・(南)斉書・梁書の南朝の記事からは、百済王統は

句→須→(子)暉→映→毗→(子)慶→(子) 牟都→(子) 牟太

→隆→(子) 明

となる。

天監元年の記事の遷居南韓地 は公州であろう。これは 502 年以降である。500 年の高句麗王は文咨明王である。

この他に、梁書では

“城を置き治める所を固麻といい、邑を簷魯という。中国の郡縣の様なものといえる。”　　**號所治城曰固麻 謂邑曰簷魯 如中國之言郡縣也**

ぴんいん　固麻：gù má、簷魯：yán lǔ

“その国は倭に近く、刺青をする者もいる。言葉と服装は高麗と概ね同じである。”　　**其國近倭 頗有文身者 今言語服章略與高驪同**

魏書百済条では

“百濟國は夫餘の出である。其國は高句麗の北千餘里で、小海の南である。・・・その衣服と飲食は高句麗と同じである。” **百濟國**

其先出自夫餘 其國北去高句麗千餘里 處小海之南・・・其衣服飲食與高句麗同

“延興二年 472 その王餘慶は初めて遣使し、上奏した。(以下長い上奏文)”

其王餘慶始遣使上表曰

小海は黄海と渤海湾の間(朝鮮湾と記した地図もある)。

周書百済条は

“百済の先祖は蓋馬韓に属し、夫餘の系統である。仇台が帯方で国を始めた。東は新羅と北は高句麗と接し、西南は大海である。東西は 450 里で南北は 900 里である。固麻城で治めている。その他に五方を持つ。中方は古沙城、東方は得安城、南方は久知下城、西方は刀先城、北方は熊津城という。”

百濟者 其先蓋馬韓之屬國 夫餘之別種 有仇台者 始國於帶方 故其地界東極新羅 北接高句麗 西南俱限大海 東西四百五十里 南北九百餘里 治固麻城 其外更有五方 中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城

(北)周は 559 年から 581 年までである、

“王の姓は夫餘氏である。” **王姓夫餘氏**

“官には 16 品がある。1 品は佐平で 5 人である。2 品は達卒で 30 人である。以下、恩率 3 品 德率 4 品 扞率 5 品 柰率 6 品と続く・・・。”

官有十六品 左平五人 一品 達率三十人二品 恩率三品 德率四品　扞率五品 柰率六品・・・

“隆が死に、子の昌が立った。”　**其王隆亦通使焉 隆死 子昌立**

“建德六年 577 斉が滅びた。昌は朝貢を始めた。”　**齊滅 昌始遣使獻方物**

“宣政元年 578 また朝貢した。”　**又遣使來獻**

王統は 隆→(子) 昌 である。

蓋馬韓之屬國は「おおむね馬韓の属国」とするか「蓋馬韓の属国」か、他に正統な解釈があるかわからない。馬韓のように蓋馬韓を用いたことが意味あるならば、2 番目の蓋馬を残すのが面白い。「蓋馬にあった国の１つ」と理解することである。

北朝の正史からは百済の王統に関する情報は少ない。 %% 追加

隋書百済条では

“百済は高麗國の出である。”　**百濟之先 出自高麗國**

“東西四百五十里 南北九百餘里で、南は新羅と接し、北には高麗がある。都は居拔城といわれている。”

其國東西四百五十里 南北九百余里 南接新羅 北拒高麗 其都曰居拔城

“東明の後、仇台は仁信に篤かった。帯方郡の在った地にその国を立てた。漢の遼東太守の公孫度は娘を(仇台の)妻にした。この後国は栄え、東夷の

強国になった。百家を従えて海を渡り百済と号した。”

東明之後 有仇台者 篤於仁信 始立其國于帶方故地 漢遼東太守公孫度以女妻之漸以昌盛 爲東夷強國 初以百家濟海 因號百濟

“人は新羅・高麗・倭などがまじっている。中国人もいる。衣服は高麗とほぼ同じである。” **其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中國人 其衣服與高麗略同**

“開皇初 581 その王餘昌は朝貢した。上開府帶方郡公百濟王とした。”

其王餘昌遣使貢方物 拜昌爲上開府 帶方郡公 百濟王

“昌が死に、子の余宣が立たった。宣が死に、子の餘璋が立った。”

昌死 子余宣立 死 子餘璋立

平陳之歳 588 戰船が１隻漂流し、海の東の躰牟羅国にたどりついた。船では還ることが出来ず百済についた。昌は手厚くもてなし、送り届け、陳の平定を奉賀する使者を派遣した。

有一戰船漂至海東躰牟羅國 其船得還 經於百濟 昌資送之甚厚 並遣使奉表賀平

“大業三年 607 璋は燕文進を派遣し、朝貢した。” **璋遣使者燕文進朝貢**

“この年、璋は王孝鄰を派遣し朝貢し、高麗を討つことを要請し、帝はこれを許した。” **其年 又遣使者王孝鄰入獻 請討高麗 煬帝許之**

“七年 611 帝は高麗に親征した。” **帝親征高麗**

“明年 612 六軍は遼河を渡った。(以下は訳せず。)”

六軍渡遼 璋亦嚴兵於境 聲言 助軍 實持兩端 尋與新羅有隙 每相戰爭

“十年 614 また朝貢した。その後国が乱れた。” **復遣使朝貢 後天下亂**

王統は 昌→(子) 宣→(子) 璋 となっている。

以上をまとめると

表 11.1 正史による百済の王統

句→須→暉→映→毗→慶→牟都→牟太→隆→昌→宣→璋（周・隋）

→明　　（梁）

となる。

%% 仇台に相当する王は　？仇首 、前百済

10.4. 百済の王統

Wiki の王統に三国史記の記事を補足したものを示す。

表 11.2 百済の王統

1 温祚王	BC18-28	父鄒牟 或云朱蒙		17 阿莘王	392-405	枕流王之元子	
2 多婁王	28-77	温祚王之元子		18 腆支王	405-420	阿莘王之元子	映・腆
3 己婁王	77-128	多婁王之元子		19 久爾辛王	420-427	腆支王長子	
4 蓋婁王	128-166	己婁王之子		20 毗有王	427-455	久爾辛王之長子	
5 肖古王	166-214	蓋婁王之子	（素古）	21 蓋鹵王	455-475	毗有王之長子	慶・慶司
6 仇首王	214-234	肖古王之長子	（貴須）	22 文周王	475-477	蓋鹵王之子	
7 沙伴王	234-234	仇首王之長子		23 三斤王	477-479	文周王之長子	
8 古尓王	234-286	蓋婁王之第二子		24 東城王	479-501	文周王弟昆支之子	牟大・摩牟
9 責稽王	286-298	古尓王子		25 武寧王	502-523	東城王之第二子	斯摩・隆
10 汾西王	298-304	責稽王長子		26 聖王	523-554	武寧王之子	明濃
11 比流王	304-344	仇首王第二子		27 威德王	554-598	聖王之元子	昌
12 契王	344-346	汾西王之長子		28 惠王	598-599	明王第二子	季
13 近肖古王	346-375	比流王第二子	句	29 法王	599-600	惠王之長子	宣
14 近仇首王	375-384	近肖古王之子	須	30 武王	600-641	法王之子	璋
15 枕流王	384-385	近仇首王之元子		31 義慈王	641-660	武王之元子	義慈
16 辰斯王	385-392	近仇首王之仲子		（豊璋王）	661-668		

上の表で、(素古)と書かれたのはWikipediaで、“三国史記・百済本紀・肖古王紀の分注や三国遺事・王暦では”に続き書かれている王名である。近尚古王以前では、この二王にのみである。

ここで、王名と前王との関係は百済本紀のものを用いた。

沙伴王に関しては、百済本紀には素古記事がなく、次の古尓王本紀に、“仇首王の長子の沙伴王が即位したが、幼少で政治を行うことができず、

肖古王母弟の古尓王が王位についた。”

仇首王在位二十一年薨 長子沙伴嗣位而幼少不能爲政 肖古王母弟古尓即位

と記されている。

前に晋書の記事

咸安二 372 年 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍

と百済本記の記事

近肖古王二十七 372 年 遣使入晉朝貢

との記年が一致していることをみた。これより次の作業仮説をおく。

紀年基準 11.1. 百済の近肖古王二十七年は 372 年である。

作業仮説 11.2. 百済の近肖古王二十七 372 年の王は餘句と名乗った。

この紀年基準は近肖古王二十七年としている年が 372 年だけで、餘句が近肖古王であるかどうかはまだ問題としておく。

近肖古王以後の百済王に関する正史の記年記事(11.3 節)と表 11.02 の各王の在位期間を見ていく。

まず、**咸安二年 372 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍（晋）** であるが、餘句は百済本記でも句としていることから、近肖古王 346-375 としてよいだろう。

孝武帝太元九年 384 百濟遣使來貢方物（晋）については、384 年王は近仇首王であるから、近仇首王(須)375-384 とする。

周書と随書に書かれた **有仇台者 始國於帶方** の仇台に対応する王が見つからない。仇を含む王は(近)仇首王である。仇首王とすれば在位期間は帯方郡の滅びる前となる。近仇首王とすれば、平壌を攻めた後帯方郡衙を都とすれば、一応辻褄が合う。

十一年 386 以百濟王世子餘暉爲使持節都督鎮東將軍百濟王（晋）については、表 11.2 で、近仇首王(須)と腆支王(映)の間には枕流王 384-385・辰斯王 385-392・阿莘王 392-405 の 3 人の王がいるが、正史に挙げられてる暉に対応する王は特定できていない。

義熙十二年 416 以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍（宋）

腆支王十二年 416 東晉安帝遣使 冊命王爲使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王

高祖踐阼 **417 進號鎮東大將軍（宋）**

義熙は東晋安帝の最後の元号で 405 年から 418 年である。宋書と百済本記の記事から、餘映は腆支王(映・腆)405-420 とする。なお。次の記事は在位期間から外れる。**少帝景平二年 423 映遣長史張威詣闕貢獻**（宋）

元嘉七年 430 百濟王餘毗復修貢職（宋）、**二十七年 450 毗上書獻方物**（宋）

餘毗は毗有王(毗) 427-455 としてよいであろう。表 11.2 では、腆支王と毗有王(慶)の間に久爾辛王 420-427 がいる。

毗死子慶代立（宋)、　　**世祖大明元年 457 遣使求除授 詔許**　（宋）

二年 458 慶遣使上表曰（宋)、太宗泰始七年 471 又遣使貢獻（宋）

延興二年 472 其王餘慶始遣使上表曰（(北)魏）

餘慶は蓋鹵王(慶・慶司) 455-475 とする。

建武二年 495 牟大遣使上表曰（(南)斉）

天監元年 502 進 太號征東將軍 尋爲高句驪所破 衰弱者累年 遷居南韓地（梁）

牟太と牟大は同じとして、東城王(牟大・摩牟) 479-501 とする。表 10.2 では、蓋鹵王(慶・慶司)と武寧王の間に、文周王 475-477、三斤王 77-479、東城王(牟大・摩牟) 479-501 がいる。また、日本書紀では 文斤王 がいたことになっている。一方、表 10.1 にある牟都が表 10.2 にはいない。

普通二年 521 王餘隆始復遣使奉表（梁）

餘隆は武寧王(斯摩・隆) 502-523 とする。

普通五年 524 隆死 詔復以其子明爲持節 督百濟諸軍事 綏東將軍 百濟王（梁）

中大通六年 534 大同七年 641 累遣使獻方物（梁）

太清三年 549 不知京師寇賊 猶遣使貢獻（梁）

明を聖王(明濃)523-554 とする。

其王隆亦通使焉隆死 子昌立（北周）

建德六年 577 齊滅 昌始遣使獻方物（北周）

宣政元年 578 又遣使來獻（北周）

開皇初 581 其王餘昌遣使貢方物 拜昌爲上開府 帶方郡公 百濟王（隋）

昌を威德王(昌)554-598 とする。

隆の次が明と昌に分かれている。朝貢先は明が南朝の梁で昌は北周である。一方、表 11.2 では 隆→明→昌→季→宣 は親子関係で繋がっている。昌は前王を隠し、隆の子として北周に朝貢したのと考える。

昌死子余宣立 死 子餘璋立（隋）

宣を法王(宣)599-600 とする。表 10.2 では、法王の前に惠王(季)598-599 がいる。

大業三年 607 璋遣使者燕文進朝貢（隋）

七年 611 帝親征高麗 璋使其臣國智牟（隋）、　　**十年 614 復遣使朝貢**（隋）

武德四年 621 其王扶餘璋遣使來獻果下馬（旧唐）、**七年 624 又遣大臣奉表朝貢**

十五年 632 璋卒 其子義慈遣使奉表告哀

璋を武王(璋)600-641 とする。義慈は義慈王 641-660 とする。

26 代 聖王(明濃)を 明 とし、隆と昌の間に入れれば、武寧王(隆)から最後の義慈王まで、在位期間の短い惠王を除いて、図表 10.1 と表 10.2 は一致する。また、梁書の 隆→明 と周書の 隆→昌 と百済本記の 隆→明→昌 を除けば、正史に名前のある王の在位期間と朝貢年はほぼ矛盾はない。

これらから近尚古王以降は史実として信じてよいと考える。これを作業仮説としておく。

作業仮説 11.3. 近尚古王以降の王統は史実である。

11.5. 修正系譜

ここでは、近尚古王以前の王について考える。

表 11.2 を前王との父子関係あるかないかという観点から眺めてみると、幾つかの奇妙なことが目につく。

まずは、沙伴王の次の第 8 代古尓王が第 4 代蓋婁王の第二子となっているが、蓋婁王の没年は 166 年で古尓王の即位は 234 年であり、差は 68 年である。

次に、304 年即位の第 11 代比流王が第 6 代仇首王の第二子であるが、仇首王の没年は 234 年でここでも 70 年の差がある。

最後に、年代はそれ程おかしくないが、第 12 代契王と第 13 代近肖古王はそれぞれ先々代の王の子になっていることである。

王名に関しては、 5 代肖古王・6 代仇首王と 13 代近肖古王・14 代近仇首王と同じ名前で後のものに近を付けている。10 世紀までの中国・朝鮮・日本では唯一の例である。日本では、68 代 後一条天皇 1016-1036 からである。なお、三国史記は 1145 年に編纂された。

ここで、次の作業仮説を設ける。

作業仮説 11.4. 百済では父子兄弟相続である。また、同じ王朝では同じ名前の王はいない。

前王との関係が父子兄弟以外のものが幾つか見られたことは指摘したが、もう少し、詳しくみることにする。

まず、温祚王から蓋婁王までは、親子で継がれている。

A: 温祚 1→(元子) 多婁 2→(元子)己婁 3→(子)蓋婁 4

蓋婁王からは肖古王と古尓王が子であるが、離れているので分ける。

B: (蓋婁子)肖古5→(長子)仇首6→(長子)沙伴7→(仇首二子) 比流11

C: (蓋婁二子)古尓 8→(子)責稽 9→(長子)汾西 10→(長子)契 12

D: (比流二子) 近肖古 13　以後は辰斯王と東城王を除いて親子

以上より、父子でつながっているもので分けてみれば、4 つのグループに分かれる。

近肖古王の在位期間は 346 年から 375 年であり、D は馬韓の地の百済と考える。

この 4 つのグループを組み合わせることを考える。作業仮説 11.4. から、B と D を同じにはできない。また、B と C を繋ぐのは元に戻ることになり、AB|CD と ACD|B の組み合わせが残る。

前者のストーリーは、AB と C の国があり、どちらかが吸収する形で D

となった。作業仮説 11.4. からは CD が AB を吸収したほうを採りたい。一方、後者では、ACD の王朝が、B を吸収した。このとき、B の王の名前を借用した。

ACD|B と AB|CD を新しい方から見ると、D の上に B と C が並び、A は B の上か C の上かになる。B の上を A´とする。これを表にしたものが次の表 10.3 である。この表における各王の在位期間は、3 列にある（ ）内のものは、表 10.2 のものである。2 列のものは、近肖古王を基準として、表 11.2 の在位期間から逆算したものである。

A と A´の差は 36 年でそんなに大きい差ではない。正史に登場するのは D グループ以降であるから、前百済を取り挙げない限り、本稿には殆ど影響はない。

表 11.3 修正百済王統

A´					A		
温祚	55-100	(BC18-28)	46		温祚	91-136	(BC18-28)	46
多婁	100-149	(28-77)	50 元子		多婁	136-185	(28-77)	50 元子
己婁	149-200	(77-128)	52 元子		己婁	185-236	(77-128)	52 元子
蓋婁	200-238	(128-166)	39 子		蓋婁	236-274	(128-166)	39 子
B					C			
肖古	238-286	(166-214)	49 蓋婁子	(素古)	古尓	274-326	(234-286)	53 蓋婁二子
仇首	286-306	(214-234)	21 長子	(貴須)	責稽	326-338	(286-298)	13 子
沙伴	306-306	(234-234)	1 長子		汾西	338-344	(298-304)	7 長子
比流	306-346	(304-344)	41 仇首二子		契	344-346	(344-346)	3 長子

近肖古　346-375　　比流二子 句

正史では、百済は夫余や高句麗との関連が書かれている。これから、北に居たACD 王朝が馬韓の地に居たB 王朝 を吸収したと考えたい。

表10.3 からは、どちらにしても、尚古王の在位期間は238年から286年となり、卑弥呼・壱与に重なってくる。

11.6. 百済の成立

馬韓の地における百済の成立については、関連する記事で考え、作業仮説 11.1. を得た。ここで、前百済の考察と共に、(馬韓の地の)百済の成立について改めて考えてみる。まずは、Wikipedia「温祚王」建国神話 から抜粋引用を行う。これらは三国史記温祚王紀前文と隋書・周書の建国部分の解説付き訳ともみられる。

Wikipedia「温祚王」建国神話: 温祚王紀前文

温祚の父は鄒牟または朱蒙(高句麗の始祖)といい、北扶余から逃れて卒本扶余(遼寧省本渓市桓仁満族自治県)に着いた。扶余王は二番目の娘を嫁がせた。その後、扶余王が亡くなったので朱蒙が王位について、二人の子をなした。長子を沸流、次子を温祚といった。朱蒙が扶余にいたときの子(高句麗の第 2 代瑠璃明王)が太子となったため、沸流・温祚はこの太子に受け容れられないことを恐れて、烏干・馬黎らの 10 人の家臣と大勢の人々とともに南方に逃れた。漢山(京畿道広州市)まできて負児嶽に上り、居留地として相応しいかどうかをみることとした。沸流は海浜に住みたいと言い出し、10 人の家臣はこの地が都とするに相応しいと諌めたが聞かず、引き連れた人々を分けて、弥鄒忽(仁川広域市)まで行ってそこに国を建て、温祚は漢山の地で慰礼城（京畿道河南市）に都を置き、国を起こした。これが前漢の鴻嘉 3 年(BC18 年)のことであり、初め 10 人の家臣に援けられたので国号を十済としたが、のちに

沸流の下に従った人たちも慰礼城に帰属し、百姓を受け容れたので国号を百済と改めた。系譜が扶余に連なるので、氏の名を扶余とした。沸流が住んだという。

漢山は漢城を連想し、京城と思っていたが、京畿道広州市と書かれている。「コネスト韓国地図」京城市の東 15Km 程に、漢江が北に凸状になった所に河南市があり、その南に広州市がある。両市の境の広州市側に南漢山城が見つかった。沸流が住んだという仁川市からは、少し回り道にはなるが、漢江を遡り到達できる。

漢字ペディア「済」のなりたち(角川新字源 改定新版)では

旧字は、形声。水と、音符齊(セイ)とから成る。もと、川の名。借りて「わたる」、転じて「すくう」意に用いる。

とあり、済に人またはその集団の意味は書かれていない。これからは、幾つかの川を渡ったとなるのではないか。

Wikipedia「広州市 (京畿道)」では

紀元前 6 年: 慰礼城(現在のソウル)から西部面春宮里(現在の河南市)に首都を移し、河南慰礼城と呼んだ。370 年: 近肖古王 25 年まで 376 年間百済の都。

Wikipedia「温祚王」建国神話: 温祚王紀前文の一書

百済の始祖は沸流王であり、父は優台といって北扶余王解扶婁の庶孫である。母の名は召西奴といって、卒本扶余の延陀勃の娘であり、はじめ優台のもとに嫁いで沸

流・温祚の二人をなした。優台が死んでから召西奴は卒本で独り暮らしをしていたが、朱蒙が高句麗国を建てたのち、召西奴を引き寄せて王妃とした。国づくりの初期において王妃の功があったので朱蒙は王妃を愛で、沸流ら二人を我が子のように待遇した。しかし、朱蒙が扶余にいた時に礼氏との間に儲けた子の解儒留(瑠璃明王)が来ると解儒留を太子とし、朱蒙の死後は解儒留が王位を継いだ。そこで沸流は温祚とともに別に国を建てることを図り、家臣を率いて高句麗を逃れて浿水(清川江)・帯水(漢江)を越え、弥鄒忽に至ってそこに住んだ。

Wikipedia「温祚王」建国神話: 隋書

百済の祖先は高麗国(高句麗)から出た(以下、扶余の建国神話である東明伝説を要約したと見られる記事が続く。)

東明の後に仇台という慈悲深い人が現れた。初めは国を帯方郡の故地に建てたが、後漢の遼東太守の公孫度が娘を嫁がせ、東夷の強国となった。百家とともに海を渡ったのに因んで百済と号した。

Wikipedia「温祚王」建国神話: 周書

隋書(656年)よりわずかに早く編纂された周書(636年)には、

百済の祖先は恐らく馬韓の属国であり、夫余の別種である。仇台というものがあって、帯方郡の地に国を興したとある。井上訳注本では、三国志夫余伝の「漢末に公孫度が勢力を増したとき、夫余王の慰仇台が遼東郡に服属した。公孫度が高句麗・鮮卑を牽制するために一族の娘を夫余王の妻とした」と言う記事を、隋書が誤って百済の記事に混同させたものとする。

Wikipedia「温祚王」治世（温祚王紀記年記事の抄訳）

建国の初めより東北辺に接する靺鞨に対する防衛の意識が強く、城柵を築いてこれに備えていた。靺鞨からは前後７回にわたる侵攻を受け、いずれも撃退している。特に前１年に侵攻を受けた際には、迎撃してその酋長の素牟を捕らえている。南方では馬韓との間に初めは親密な関係を保っていたが、瑞祥を得て馬韓・辰韓を併呑する気になり、後８年から後９年にかけて馬韓を急襲してこれを滅ぼした。後に後16年には馬韓の旧将が反乱を起こしたので王自ら討伐し、これを鎮圧した。北方では前15年に楽浪郡に使者を送って国交を開いたが、防備のための城柵を築いたことを咎められ、前11年７月には和親が失われた。

このように北方・東北方の国防の観点から、前５年には都を漢水の南に移しており、漢水の西北に城郭を築いた。前２年には楽浪郡の侵攻を受けて、旧都の慰礼城を焼かれている。温祚王の一代を通じて、その領域は北は浿水(清川江)、東は走壌(江原道春川市)、西は黄海に至った(南は未詳)。

この記事は色々疑問となる内容を含んでいる。一番大きいものは「後８年から後９年にかけて馬韓を急襲してこれを滅ぼした。」である。一方、後漢書・三国志・晋書と滅ぼした馬韓が取り挙げられている。楽浪郡の近くにこのよう国があった場合、郡の記録に書かれたはずである。

本章の はじめに で温祚王紀の次の記事を取り挙げた。

温祚王十三年 BC5 遣使馬韓 告遷都 遂畫定疆場 北至河 南限熊川 西窮大海 東極走壤

また、ある時に馬韓かその周辺の地を領有し、馬韓にこのような通告をした、すなわち、馬韓の地を征服(攻略)したことは考えられるとした。

これが「温祚王」治世の「前 5 年には都を漢水の南に移しており、漢水の西北に城郭を築いた。」に対応するであろう。

これから、温祚王が建国したのは馬韓の地以外ということになる。また、楽浪郡は BC100 年頃に、帯方郡は 200 年頃に設置され、313 年まで存続した。この間に馬韓の地に国が造られれば、記録に残るはずである。

また、靺鞨は現在の北朝鮮の北東部に居たことになっている。ここと馬韓の間には、楽浪郡の東部都尉が治める嶺東七県がある。これを挟んで抗争があれば、楽浪郡の記録に残るはずである。

さらに、馬韓の諸国は帯方郡の直接のコントロール下に置かれていたのではと述べた。

これらから、温祚王の初めに造った国は、靺鞨と頻繁に抗争が可能で、楽浪郡や帯方郡に興味を興させない土地、すなわち、楽浪郡の北から東にあったことになる。この地は高句麗の東隣となる。

周書と隋書の記事の仇台を考える。

始國於帯方と始立其國于帯方故地を「帯方で国を始めた」とした。すなわち、

百済王の仇台が帯方の地に建国した。帯方故地は「帯方郡のあった地」と理解している。帯方故地ということから、仇台の建国は帯方郡滅亡のあとである。帯方故地が、馬韓の地を含むかが疑問であるが、三国志では馬韓が扱われていることから、馬韓は帯方故地には含まれないと考える。

ここで、仇台が百済の王の誰かが課題となる。王名に仇の付く王は仇首王と近仇首王である。在位期間と作業仮説 7.1.から、可能性のあるのは近仇首王となる。

ぴんいん　仇：chóu、台：tái、首：shǒu、須：xū、句：jù

作業仮説 10.1.の下限 369 年は、高句麗本紀の記事

故國原王三十九年 369 王以兵二萬 南伐百濟 戰於雉壤 敗績

による。百済本記からの 369 年の百済王は近尚古王 346-375 である。

313 年の百済王は、百済本記(表 10.2)からは比流王、修正系譜(表 10.3)からは、比流王と古尓王になる。ACD/B 説からは、古尓王としたい。

周書に書かれている五方の中で位置が分かっているのは熊津城で、公州とされている。他の城は公州以南となる。

これから、次のストーリーを想いつく。

古尓王の時代に(遼西)から馬韓以南に移住し、馬韓の地を勢力下におい

た。近尚古王の時代に勢いを増し、高句麗の制圧の対象となった。369 年に高句麗を破ったことにより、372 年に晋に朝貢した。このとき、国名が韓諸国の名前ではなかったので、韓条には入れられなかった。近仇首王の時代には帯方の故地を都とした。

靺鞨（←勿吉←粛慎・挹婁）

おわりに

付録Ⅰ 三国史記百済温祚王紀

百濟始祖 温祚王 其父鄒牟 或云朱蒙 自北扶餘逃難 至卒本扶餘 扶餘王無子 只有三女子 見朱蒙 知非常人 以第二女妻之 未幾 扶餘王薨 朱 蒙嗣位 生二子 長曰沸流 次曰温祚 【或云 朱蒙到卒本 娶越郡女 生二子】 及朱蒙在北扶餘所生子來爲太子 沸流・温祚 恐爲太子所不容 遂與烏干・ 馬黎等十臣南行 百姓從之者多 遂至漢山 登負兒嶽 望可居之地 沸流欲居於海濱 十臣諫曰 惟此河南之地 北帶漢水 東據高岳 南望沃澤 西阻大海 其 天險地利 難得之勢 作都於斯 不亦宜乎 沸流不聽 分其民 歸彌鄒忽以居之 温祚都河南慰禮城 以十臣爲輔翼 國號十濟 是前漢成帝鴻嘉三年也 沸流以 彌鄒 土濕水鹹 不得安居 歸見慰禮 都邑鼎定 人民安泰 遂慙悔而死 其臣民皆歸於慰禮 後以來時百姓樂從 改號百濟 其世系與高句麗 同出扶餘 故以 扶餘爲氏 【一云 始祖沸流王 其父優台 北扶餘王解扶婁庶孫 母召西奴 卒本人延勃之女 始歸于優台 生子二人 長曰沸流 次曰温祚 優台死 寡居于卒 本 後朱蒙不容於扶餘 以前漢建昭二年 春二月 南奔至卒本 立都號高句麗 娶召西奴爲妃 其於開基創業頗有内助 故朱蒙寵接之特 厚 待沸流等如己子 及朱蒙在扶餘所生禮氏子孺留來 立之爲太子 以至嗣位焉 於是 沸流謂弟温祚曰 始大王避扶餘之難 逃歸至此 我母氏傾家財 助成邦業 其勸勞多矣 及 大王厭世 國家屬於孺留 吾等徒在此 鬱鬱如疣贅 不如奉母氏 南遊卜地 別立國都 遂與弟率黨類 渡帶二水 至彌鄒忽以居之 北史及隋書皆云 東明之後 有仇台 篤於仁信 初立國于帶方故地 漢遼東太守公孫度以女妻之 遂爲東夷強國 未知孰是】

付録２　正史の隋書以前の百済条

宋書

百濟國 本與高驪俱在遼東之東千餘里 其後高驪略有遼東 百濟略有遼西 百濟所治謂之晉平郡晉平縣

義熙十二年 以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍 百濟王 [12]高 祖踐阼 進號鎮東大將軍 少帝景平二年 映遣長史張威詣闕貢獻 元嘉二年 太祖詔之曰：「皇帝問使持節 都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 百濟王 累葉忠順　 越海効誠 遠王纂戎 聿修先業 慕義既彰 厥懷赤款 浮桴驪水 獻賾執贄 故嗣位方任 以藩東服 勉勗所莅 無墜前蹤 今遣兼謁者閭丘恩子 兼副謁者丁敬 子等宣旨慰勞稱朕意 」其後每歲遣使奉表 獻方物 七年 百濟王餘毗復修貢職 以映爵號授之 二十七年 毗上書獻方物私假臺使馮野夫西河太守 表求易 林 式占 腰弩 太祖並與之 毗死 子慶代立 世祖大明元年 遣使求除授 詔許 二年 慶遣使上表曰：「臣國累葉 偏受殊恩 文武良輔 世蒙朝爵 行冠軍 將軍右賢王餘紀等十一人 忠勤宜在顯進 伏願垂愍 並聽賜除 」仍以行冠軍將軍右賢王餘紀為冠軍將軍 以行征虜將軍左賢王餘昆 行征虜將軍餘暈並為征虜將 軍 以行輔國將軍餘都 餘乂並為輔國將軍 以行龍驤將軍沐衿 餘爵並為龍驤將軍以行寧朔將軍餘流 麋貴並為寧朔將軍 以行建武將軍于西 餘婁並為建武將 軍 太宗泰始七年 又遣使貢獻

牟大又表曰：「臣所遣行建威將軍 廣陽太守 兼長史臣高達 行建威將軍 朝鮮太守 兼司馬臣楊茂 行宣威將軍 兼參軍臣會邁等三人 志行清亮 忠款夙著 往泰始中 比使宋朝 今任臣使 冒涉波險 尋其至效 宜在進爵 謹依先例 各假行職 且玄澤靈休 萬里所企 況親趾天庭 乃不蒙賴 伏願天監特 潛除正 達邊效夙著 勤勞公務 今假行龍驤將軍 帶方太守 茂志行清壹 公務不廢 今假行建威將軍 廣陵太守 邁執志周密 屢致勤效 今假行廣武將軍 清 河太守 」詔可 竝賜軍號 除太守 爲使持節 都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 使兼竭者僕射孫副策命大襲亡祖父牟都爲百濟王 曰：「於戲！惟爾世襲忠勤 誠 著遐表 滄路肅澄 要貢無替 式循彝典 用纂顯命 往欽哉！其敬膺休業 可不慎歟！制詔行都督百濟諸軍事 鎮東大將軍百濟王牟大今以大襲祖父牟都爲百濟 王 卽位章綬等玉銅虎竹符四 王其拜受 不亦休乎！」

是歲 魏虜又發騎數十萬攻百濟 入其界 牟大遣將沙法名 贊首流 解禮昆 木幹那率衆襲擊虜軍 大破之 建武二年 牟大遣使上表曰：「臣自昔受 封 世被朝榮 忝荷節鉞 克攘列辟 往姐瑾等竝蒙光除 臣庶咸泰 去庚午年 獫狁弗悛 舉兵深逼 臣遣沙法名等領軍逆討 宵襲霆擊 匈梨張惶 崩若海蕩 乘奔追斬 僵屍丹野 由是摧其銳氣 鯨暴韜凶 今邦宇謐靜 實名等之略；尋其功勳 宜在褒顯 今假沙法名行征虜將軍 邁羅王 贊首流爲行安國將軍 辟中 王 解禮昆爲行武威將軍 弗中侯 木幹那前有軍功 又拔臺舫 爲行廣威將軍 面中侯 伏願天恩特潛聽除 」又表曰：「臣所遣行龍驤將軍 樂浪太守兼長史臣 慕遺 行建武將軍 城陽太守兼司馬臣王茂 兼參軍 行振武將軍 朝鮮太守臣張塞 行揚武將軍陳明 在官忘私 唯公是務 見危授命 蹈難弗顧 今任臣使 冒 涉波險 盡其

至誠 實宜進爵 各假行署 伏願聖朝特賜除正 」詔可 竝賜軍號

梁書

百濟者 其先東夷有三韓國 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 弁韓 辰韓各十二國 馬韓有五十四國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 百濟卽 其一也 後漸強大 兼諸小國 其國本與句驪在遼東之東 晉世句驪旣略有遼東 百濟亦據有遼西 晉平二郡地矣自置百濟郡 晉太元中 王須；義熙中 王餘 映；宋元嘉中 王餘毗；並遣獻生口 餘毗死立子慶 慶死 子牟都立 都死 立子牟太 齊永明中 除太都督百濟諸軍事 鎮東大將軍百濟王 天監元年 進 太號征東將軍 尋爲高句驪所破 衰弱者累年 遷居南韓地 普通二年 王餘隆始復遣使奉表 稱「累破句驪 今始與通好」 而百濟更爲強國 其年 高祖詔曰： 「行都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 百濟王餘隆 守籓海外 遠脩貢職 乃誠款到朕有嘉焉 宜率舊章 授茲榮命 可使持節 都督百濟諸軍事 寧東大將軍 百 濟王 」五年 隆死 詔復以其子明爲持節 督百濟諸軍事 綏東將軍 百濟王 號所治城曰固麻 謂邑曰簷魯 如中國之言郡縣也

其國有二十二簷魯 皆以子弟宗族分據之 其人形長 衣服淨潔 其國近倭 頗有文身者今言語服章略與高驪同 行不張拱 拜不申足則異 呼帽曰 冠 襦曰復衫 袴曰褌 其言參諸夏 亦秦 韓之遺俗云 中大通六年 大同七年 累遣使獻方物；并請《涅盤》等經義《毛詩》博士 幷工匠 畫師等 敕並給 之 太清三年 不知京師寇賊 猶遣使貢獻；旣至見城闕荒毀 並號慟涕泣 侯景怒 囚執之 及景平 方得還國

魏書

濟國 其先出自夫餘 其國北去高句麗千餘里 處小海之南 其民土著 地多下濕 率皆山居 有五穀 其衣服飲食與高句麗同

延興二年 其王餘慶始遣使上表曰：「臣建國東極 豺狼隔路 雖世承靈化 莫由奉藩 瞻望雲闕 馳情罔極 涼風微應 伏惟皇帝陛下協和天休 不勝係仰 之情 謹遣私署冠軍將軍 駙馬都尉弗斯侯 長史餘禮 龍驤將軍 帶方太守 司馬張茂等投舫波阻 搜徑玄津 託命自然之運 遣進萬一之誠 冀神祇垂感 皇靈 洪覆 克達天庭 宣暢臣志 雖旦聞夕沒 永無餘恨 」又云：「臣與高句麗源出夫餘 先世之時 篤崇舊款 其祖釗輕廢隣好 親率士眾 陵踐臣境 臣祖須整旅 電邁 應機馳擊 矢石暫交 梟斬釗首 自爾已來 莫敢南顧 自馮氏數終 餘燼奔竄 醜類漸盛 遂見陵逼 構怨連禍 三十餘載 財殫力竭 轉自孱蹶 若天慈 曲矜 遠及無外 速遣一將 來救臣國 當奉送鄙女 執掃後宮 并遣子弟 牧圉外廐 尺壤匹夫不敢自有 」又云：「今璉有罪 國自魚肉 大臣強族 戮殺無 已 罪盈惡積 民庶崩離 是滅亡之期 假手之秋也 且馮族士馬 有鳥畜之戀；樂浪諸郡 懷首丘之心 天威一舉 有征無戰 臣雖不敏 志效畢力 當率所統　承風響應 且高麗不義 逆詐非一 外慕隗囂藩卑之辭 內懷兇禍豕突之行 或南通劉氏 或北約蠕蠕 共相脣齒 謀陵王略 昔唐堯至聖 致罰丹水；孟常稱仁　不捨塗詈 涓流之水 宜早壅塞 今若不取 將貽後悔 去庚辰年後 臣西界小石山北國海中見屍十餘 并得衣器鞍勒 視之非高麗之物 後聞乃是王人來降臣國　長蛇隔路 以沉于海 雖未委當 深懷憤恚 昔宋戮申舟 楚莊徒跣；鷂撮放鳩 信陵不食 克敵建名 美隆無已 夫以區區偏鄙 猶慕萬代之信 況陛下合氣天 地 勢傾山海 豈令小豎 跨塞天逵 今上所得鞍一 以為實驗 」

顯祖以其僻遠 冒險朝獻 禮遇優厚 遣使者邵安與其使俱還 詔曰：「得表聞之 無恙甚善 卿在東隅 處五服之外 不遠山海 歸誠魏闕 欣嘉至意 用 戢于懷 朕承萬世之業 君臨四海 統御羣生 今宇內清一 八表歸義 襁負而至者不可稱數 風俗之和 士馬之盛 皆餘禮等親所聞見 卿與高麗不穆 屢致陵 犯 苟能順義 守之以仁 亦何憂於寇讎也 前所遣使 浮海以撫荒外之國 從來積年 往而不返 存亡達否 未能審悉 卿所送鞍 比校舊乘 非中國之物 不可 以疑似之事 以生必然之過 經略權要 已具別旨 」又詔曰：「知高麗阻強 侵軼卿土 修先君之舊怨 棄息民之大德 兵交累載 難結荒邊 使兼申胥之誠 國 有楚越之急 乃應展義扶微 乘機電舉 但以高麗稱藩先朝 供職日久 於彼雖有自昔之釁 於國未有犯令之愆 卿使命始通 便求致伐 尋討事會 理亦未周 故 往年遣禮等至平壤 欲驗其由狀 然高麗奏請頻煩 辭理俱詣 行人不能抑其請 司法無以成其責 故聽其所啟 詔禮等還 若今復違旨 則過咎益露 後雖自陳 無所逃罪 然後興師討之 於義為得 九夷之國 世居海外 道暢則奉藩 惠戢則保境 故羈縻著於前典 楛貢曠於歲時 卿備陳強弱之形 具列往代之迹 俗殊事 異 擬貺乖衷 洪規大略 其致猶在 今中夏平一 宇內無虞 每欲陵威東極 懸旌域表 拯荒黎於偏方 舒皇風於遠服 良由高麗即敍 未及卜征 今若不從詔 旨 則卿之來謀 載協朕意 元戎啟行 將不云遠 便可豫率同興 具以待事 時遣報使 速究彼情 師舉之日 卿為鄉導之首 大捷之後 又受元功之賞 不亦善 乎 所獻錦布海物雖不悉達 明卿至心 今賜雜物如別 」又詔璉護送安等 安等至高句麗 璉稱昔與餘慶有讎 不令東過 安等於是皆還 乃下詔切責之 五年 使安等從東萊浮海 賜餘慶璽書 褒其誠節 安等至海濱 遇風飄蕩 竟不達而還

周書

百濟者 其先蓋馬韓之屬國 夫餘之別種 有仇台者 始國於帶方 故其地界東極新羅 北接高句麗 西南俱限大海 東西四百五十里 南北九百餘里 治固麻城 其外更有五方：中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城

王姓夫餘氏 號於羅瑕 民呼為鞬吉支 夏言竝王也 妻號於陸 夏言妃也 官有十六品 左平五人 一品；達率三十人 二品；恩率三品；德率四品； 扞率五品；柰率六品 六品已上 冠飾銀華 將德七品 紫帶；施德八品 皂帶；固德九品 赤帶；(李)〔季〕德十品 青帶；對德十一品 文督十二品 皆黃 帶；武督十三品 佐軍十四品 振武十五品 克虞十六品 皆白帶 自恩率以下 官無常員 各有部司 分掌衆務 內官有前內部 穀部 肉部 內掠部 外掠部 馬部 刀部 功德部 藥部 木部 法部 後官部 外官有司軍部 司徒部 司空部 司寇部 點口部 客部 外舍部 綢部 日官部 都市部 都下有萬家 分為 五部 曰上部 前部 中部 下部 後部 統兵五百人 五方各有方領一人 以達率為之；郡將三人 以德率為之 方統兵一千二百人以下 七百人以上 城之內外 民庶及餘小城 咸分（肄）〔隸〕焉

其衣服 男子畧同於高麗 若朝拜祭祀 其冠兩廂加翅 戎事則不 拜謁之禮 以兩手據地為敬 婦人衣（以）〔似〕袍 而袖微大 在室者 編發盤於 首 後垂一道為飾；出嫁者 乃分為兩道焉 兵有弓箭刀矛 俗重騎射 兼愛墳史 其秀異者 頗解屬文 又解陰陽五行 用宋《元嘉曆》 以建寅月為歲首 亦解 醫藥卜筮占相之術 有投壺 樗蒲等雜戲 然尤尚奕棊 僧尼寺塔甚多 而無道士 賦稅以布絹絲麻及米等 量歲豐儉 差等輸之 其刑罰：反叛 退軍及殺人者 斬；盜者 流 其贓兩倍徵之；婦人犯姦者 沒入夫家為婢 婚

娶之禮 畧同華俗 父母及夫死者 三年治服；餘親 則葬訖除之 土田下濕 氣候溫暖 五穀雜果 菜蔬及酒醴肴饌藥品之屬 多同於內地 唯無駝驢騾羊鵝鴨等 其王以四仲之月祭天及五帝之神 又每歲四祠其始祖仇台之廟

自晉 宋 齊 梁據江左 後魏宅中原 竝遣使稱藩 兼受封拜 齊氏擅東夏 其王隆亦通使焉 隆死 子昌立 建德六年 齊滅 昌始遣使獻方物 宣政元年 又遣使來獻

隋書

百濟之先 出自高麗國 其國王有一侍婢 忽懷孕 王欲殺之 婢云：「有物狀如雞子 來感於我 故有娠也 」王舍之 後遂生一男 棄之廁溷 久而 不死 以爲神 命養之 名曰東明 及長 高麗王忌之 東明懼 逃至淹水 夫餘人共奉之 東明之後 有仇台者 篤於仁信 始立其國于帶方故地 漢遼東太守公 孫度以女妻之 漸以昌盛 爲東夷強國 初以百家濟海 因號百濟 曆十餘代 代臣中國 前史載之詳矣 開皇初 其王餘昌遣使貢方物 拜昌爲上開府 帶方郡 公 百濟王

其國東西四百五十里 南北九百余里 南接新羅 北拒高麗 其都曰居拔城 官有十六品：長曰左平 次大率 次恩率 次德率 次杆率 次奈率 次將 德 服紫帶；次施德 皁帶；次固德 赤帶；次李德 青帶；次對德以下 皆黃帶；次文督 次武督 次佐軍 次振武 次克虞 皆用白帶 其冠制並同 唯奈率以 上飾以銀花 長史三年一交代 畿內爲五部 部有五巷 士人倨焉 五方各有方領一人 方佐貳之 方有十郡 郡有將 其人雜有新羅 高麗倭等 亦有中國人　其衣服與高麗略同 婦人不加粉黛 女辮發垂後 已出嫁則分爲兩道盤於頭上 俗尚騎射 讀書史 能吏事 亦知醫藥 蓍龜 占相之術 以兩手據地爲敬 有僧

尼 多寺塔 有鼓角 箜篌 箏 竽 篪 笛之樂 投壺 圍棋 樗蒲 握槊 弄珠之戲 行宋《元嘉曆》 以建寅月爲歲首 國中大姓有八族 沙氏 燕氏 刀 氏 解氏 貞氏 國氏 木氏 苗氏 婚娶之禮 略同于華 喪制如高麗 有五穀 牛 豬 雞 多不火食 厥田下濕 人皆山居 有巨栗 每以四仲之月 王祭天 及五帝之神 立其始祖仇台廟于國城 歲四祠之 國西南人島居者十五所 皆有城邑

平陳之歲 有一戰船漂至海東躰牟 羅國 其船得還 經於百濟 昌資送之甚厚 並遣使奉表賀平陳 高祖善之 下詔曰:「百濟王既聞平陳 遠令奉表 往復至難 若逢風浪 便致傷損 百濟王心跡 淳至 朕已委知 相去雖遠 事同言面 何必數遣使來相體悉 自今以後不須年別入貢 朕亦不遣使往 王宜知之 」使者舞蹈而去 開皇十八年 昌使其長史王辯那來獻方物 屬興遼東之役 遣使奉表 請爲軍導 帝下詔曰:「往歲爲高麗不供職貢無人臣禮 故命將討之 高元君臣恐懼 畏服歸罪 朕已赦之 不可致 伐 」厚其使而遣之 高麗頗知其事 以兵侵掠其境

昌死 子余宣立 死 子餘璋立 大業三年 璋遣使者燕文進朝貢 其年 又遣使者王孝鄰入獻 請討高麗 煬帝許之 令覘高麗動靜 然璋內與高麗通 和 挾詐以窺中國 七年 帝親征高麗 璋使其臣國智牟來請軍期 帝大悅 厚加賞錫 遣尚書起部郎席律詣百濟 與相知 明年 六軍渡遼 璋亦嚴兵於境 聲言 助軍 實持兩端 尋與新羅有隙 每相戰爭十年 復遣使朝貢 後天下亂 使命遂絕

其南海行三月 有躰牟羅國 南北千餘里 東西數百里 土多麞鹿 附庸於百濟 百濟自西行三日 至貊國云